



市立奈良病院の脳神経外科における 特定ケア看護師の働き方

市立奈良病院 特定ケア看護師 吉田奈津美

病院紹介

私の勤める市立奈良病院は病床数350、29の診療科を掲げ、救急を年間4,200件受け入れている急性期病院としての側面と、奈良県下にある複数の診療所と連携する地域密着型の側面を持つ病院として存在しています。奈良市の中でも奈良公園や世界遺産春日大社に近い観光地の中に立地していることもあり、外国人観光客が多く搬送されてくることも特徴の一つです。

所属体制

地域医療振興協会が特定行為にかかる看護師の教育機関を設立し、その1期生として私は研修を受けました。昨年4月に自施設での研修も終えてからは看護部管理室に籍をおき、脳神経外科の特定ケア看護師として脳神経センターで活動を行っています。

日常の業務

業務内容は主に脳外科とそれ以外に分かれます。

当院の脳神経外科は脳卒中ホットライン体制をとっており、24時間365日脳卒中が疑われる患者の救急受け入れを行っています。緊急手術になることも少なくなく、日々医師は外来業務と超急性期患者の対応に追われています。

私は病棟で急性期からリハビリ期の患者の内科的管理を中心に患者に関わっています。

まずは毎朝医師と今日行うべきこと、方針の打ち合わせを行ったあと、患者のもとへ訪室し、発熱していたり、何か不調を訴える患者の診察

を行い、採血などの検査が必要と判断すれば、医師へ報告しながら、検査依頼を出します。また、所見とデータをもとに考えられることと介入の提案をし、承認を得て対応します。他科へのコンサルテーションが必要な場合は依頼を出します。

医師が手術などで朝から夜まで不在であっても病棟患者の管理に関してリアルタイムで行っていると実感しています。

また、看護師をはじめリハビリスタッフ、栄養士、薬剤師、入退院支援課など多職種とも連携を図り、専門的意見を聞きながら医師の方針を伝えたり確認したりするのも私の重要な仕事と捉えています。患者の転帰について、スピーディに方向性を決めていけるだけでなく、お互いが専門的知識をもって、ディスカッションすることで知識を高めあう機会にもなっています。

特定行為そのものを行う頻度は決して多くありません。それよりも日々、患者にまつわる医学的問題を臨床推論を用いてアセスメントし、解決策を模索する活動の方が圧倒的に多く、業務の大半を占めています。1年間の特定行為実施件数総数は290件(院内認定の特定行為は除く)、1日あたり1.2件でした。その中で多数を占めた特定行為は動脈採血や気管切開チューブの交換、抗菌薬の投与、電解質の補正、脱水の補正などです。また、院内のいろいろな診療科からPICC(末梢型中心静脈カテーテル)挿入依頼を受け、習得した特定行為を実践する場面も増えてきました。

ほか、脳外科以外の院内における業務とし



脳外科での朝のカンファレンス

て、当院ではRRS(院内急変対応システム)を2018年より立ち上げており、そのメンバーとして症例に対するフィードバックや啓発活動を行っています。

活動の効果

脳外科に所属して1年、ようやく「当院の脳外科における特定ケア看護師」のスタイルが私自身にも周囲にも浸透してきたように感じています。

医師は常に多忙なため、スタッフも患者も医師へのアクセスが困難になりがちですが、私はその中継をすることができます。それによって多くの人が、タイムロスを軽減できているのではないかと思います。

また看護師としては自分の持っている知識や技術を日々の関わりの中で伝えることもできる

し、医師には聞きにくいようなことも質問してくれる後輩も増えました。

特定ケア看護師にしか味わえない視点

私は看護師として約10年ほど経験を積み、その中で「この患者は呼吸器離脱できるのではないだろうか」「もっと離床を促していけそうだが、医師は手術中で聞けそうにもないな」など日々考えることがありました。日中に医師とコミュニケーションを図れないまま1日が終わってしまい、患者に提供できるはずの医療やケアが後手にまわることをよく経験しました。また、後輩看護師からいろいろなことを相談されても煮え切らない判断しかできないこと、それだけしか自分が患者の病態などを理解できていないことにも歯がゆさを感じていたこともあり、この特定行為研修を受けて自分にできることが増えれば患者への医療の提供が、少しでもタイムリーに行えるのではないかと思います。この研修に臨みました。あれから3年半経過し、なんとか(?) 独り立ちして気付いたことは、看護師の目線で患者を見る時と、医師(ではないですが)の目線で患者を診るとき、両方の視点を使い分けている自分がいたことです。この視点の違いがあるから看護師と医師のコミュニケーションは上手く伝わらなかったり、伝えられなかったりすることも納得できました。私にしか持てないこの特殊な視点を強みに、もっとチーム医療の橋渡しができるよう励んでいきたいです。